

伊藤—— それでは、最後のパネルディスカッションと質疑応答を始めていきたいと思います。

本日ご登壇いただいた先生方みなさん、偶然ではありますが、思想あるいは文学系統の先生です。女性の生き方とか女子大学の意義とかいうことを考えるときには、社会学や教育学といった観点から話が進められることが多いかと思うのですけれども、そういう意味でも、今回たいへん面白い話がいろいろ伺えたのではないかと思います。

時間もありませんので先生方のお話をあらためてまとめるということはいたしません、四点到テーマを絞ってパネルディスカッションを進めていききたいと思います。

一つ目は、「女子大学の意義」ということに関してです。本日は福井先生や湯浅先生がそういうことについて中心にお話しくださったと思いますが、女子大学が今の時代にもつ意義ということについてあらためてご意見を伺いたい。

二点目は、「女性のリーダーシップとは何か」という問題です。竹内先生は刀自という表現の含意についてお話しくださった際に、女性のもてなす力ということをおっしゃっていました。それをマネジメントという言い方もしていらつしやいましたが、そのマネジメントということと、たとえば羽入先生が大学でやつていらつしやるリーダーを育てるということとは、また少し違うのかなという気がします。それが同じなのか、それとも違うのか。羽入先生がお話しくださったお茶の水女子大学の取り組みの内実などもあわせて、もう一度お話しいただければと思っております。

次に、「男らしさ／女らしさ」という問題です。ジェンダーフリーという言葉が今では使われなくなっているということも含めて、竹内先生がお話しくださったこと、あるいは福井先生があらためて女性性というものを理解するということをおっしゃっていました。男らしさ／女らしさ」ということを今、あらためてどのように考えるのかということですが、

そして四点目は、大学が、学祖の精神とか、あるいは建学の理念に立ち戻ることが近年たいへん多くなっています、学長の先生もいらつしやることですし、そのことに關しての意見なども伺いたいと思っております。

### 女子大学の意義

伊藤—— それではまず「女子大学の意義」について、福井先生、いかがでしょう。

福井—— 私は女子大学にはやはり共学大学とは違った役割があると思っております。そのひとつとして、共学大学ではできない授業の提供ということがあります。私どもの鎌倉女子大学では「女性と文化」という授業をそれぞれ専門の異なる先生方が集まったオムニバスの形式で行っております。どんな授業なのかといえ、たとえばイザナギ・イザナミからはじまって近・現代の与謝野晶子や向田邦子さんまで、日本において女性と文化がどのようにに語られてきたのか、また今日のことですから国際比較も視野におさめながら、異文化圏において女性と文化がどのようにに語られているのか、そういったことを概観しながら、女性が担ってきた役割や文化的意義についてあらためて考えてみよう、さらに



は将来を展望しながら、文化創造の主体としての女性の可能性を探っていこうといった内容です。

また、メデイカルドクターによるオムニバス講義で、「女性と健康」という授業も設定されています。この「女性と健康」を担当するドクターがこう言っておりました。たとえば、がんの発症、病状の告知なども、あきらかに女性と男性との間には受け取り方の違いがある、したがってこうした問題について、情報提供も含めて女子学生諸君に伝えておいてやらなくてはならないし、みずからが抱えもっている属性や可能性について考えてもらう必要があるんだと。

私は共学大学で二十年ほど勤めた経験がありますが、こうした科目はやはり共学大学ではなかなか設定しにくい授業で、その点女子大学は女性に特化した授業を提供しやすい、ということとは「文化」を提供しやすいということがやはりあるのだと思います。

世界的にも注目されたわけですが、アメリカのアルバーノ・カレッジでは八つのコア能力の形成ということが掲げられています。その中にはもちろん共学大学とも重なる事柄も多々あるわけですが、しかしそのひとつに、女性特有の“aesthetic engagement”ということが挙げられているんですね。この言葉の訳し方はいろいろあるでしょうけれど、私は「審美的なものに自己を差し向ける努力」とでも訳すのが適当なのではないかと思っています。また、

ヒラリー・クリントンさんの母校として有名なウェルズリー・カレッジでは女性の可能性を剥奪するようなジェンダーフリーの教育ではなく、女性の可能性を引き出すジェンダーセンシティブな教育でなければならぬとして、特別なカリキュラムや教授法、たとえば女性的な認識法の開発といったようなものについて研究が推進されているんですね。特にこれらは主として女性研究者達によって行われているわけです。つまりそこには共学大学とはあきらかに異なる思想や理想が堂々と盛りこまれているわけです。

したがって、私は共学大学では経験できない文化の提供という意味からしても、女子大学の固有の意義や役割が間違いなくあると思っています。

伊藤—— 竹内先生、お願いいたします。

竹内—— 僕は今、女子大学でも教えていますが、女子大学って独特の雰囲気があるんですね。もちろん共学にも共学なりの雰囲気はありますが、女子大学の持つているムードというのは特別なものです。僕はその雰囲気、ムードみたいなもの、それ自体に相対的な存在意義があると思っています。

お話し申し上げましたように、今はあまりにも均質化、均一化、標準化が進んできているわけで、たとえば教育の場にそうした女

性だけの特異な場というものがあれば、さきほど福井先生が言われた aesthetic engagement といったようなものもうまく涵養できてる、そしてそれがまた雰囲気を作っていくということになるわけです。みんながみんなお金を稼ぐ、あるいは権力を手に入れていくという教育ではない、そういう場があってもいいし、というか、あつたほうがいいと思います。ですから僕は、そういう意味で女子大学というものはこれからあるべきだし、あるいはもつと力を入れてそうしたものを世に広めていく、強めていく必要があるというふうに思っています。

福井—— もちろん人それぞれの立場に立てば、一人ひとりの関心に応じて共学に行こうと女子大学に行こうとどちらでも構わないと思いますよ。ただ、敢えて女子大学に学ぶメリットは何かと問われれば、私は女子大学で学ぶ人たちは二つの異なる社会を生きて、二つの異なる文化を体験することができるところにあると思うんですね。

もちろん、私たちは通常は生まれてこのかた、男女によって構成された社会の中で生きています。たとえば家庭にはお父さんがいい、お兄さんがいい、社会にはさまざま異性がいい。その中でつかみ取る女性らしさということもたしかにあると思います。人間は自分とは異質なもののの中に身を置くことによって、却って自分が

照らし出され、自分の可能性が際立つということもあるからです。しかし他方、現実社会の中ではお互いにどうしても異性との影響関係の中におかれているわけですので、ここはちよつと遠慮してしまおうとか、黙ってしようとか、いや却って過剰に振舞った方が自分をアピールできるといったような、特にゼミナールや議論の場面などでそういうこともあるわけですね。そういう意味で女性性が内在させている文化とインテンシブに触れあう機会を逸したまま過ごしてしまっていることもあるように思います。

一日二十四時間のうちで、三分の一の八時間は眠っているとして、残りの十六時間の二分の一の八時間は人間はみな通常の現実社会で生きるわけですが、女子大学に学ぶ人は残りの二分の一の八時間を、ちよつと現実社会から身を引いた同性だけの社会の中にあつてインテンシブにそうしたものと触れあう経験をしているということになる。これはやはりかなり貴重な経験と言っているのではないかと思うのです。つまり、女子大学の学生は通常の現実社会とやや仮構された社会との間を相互に行き交う経験をしているということになるわけで、その点、女子大学に学ぶ人は共学大学に学ぶ人よりも複合的な文化経験をしているということになるのではないか。私はそういう側面を女子大学の可能性としてもつと強調していいのではないかと思います。

羽入——女性が主体性を発揮する、女性が主役の世界を提供する、つまり女性が主役の時間を過ごす、過ぎざるを得ないということが、女子大学のひとつの大きな役割ではないかと学生も言っていますし、私もそのように思っております。

湯浅——羽入先生のおっしゃることも本当にそう思いますし、福井先生のおっしゃるように、共学大学では提供できない授業が提供しやすいところがあります。それから、短大や大学卒業後のライフステージを考えてみれば、女性は事実として男性よりはるかに選択肢が多い、複雑と言ってもいいかもしれない。一度社会に出て働き、結婚し、出産。でもそのスキルを生かして、子育てがちよつと一段落してまた社会に出たいなんていうときに、やはり女子大学は応援しなければならない。

ご存じのように女子大学はマンモス校ではありません。だいたいい中規模以下ですので、学生や卒業生に手がかけられるということでもあります。きめ細かな教育かいのか、そんなに面倒をみると育たないじゃないかという反論もあるのですけれども、でもやはり肝心なところに手がかけられるというのも女子大だと僕は思います。

竹内——「あの女子大の卒業生には独自の雰囲気がある」とか

「情緒がある」とかいった言い方は、相当の褒め言葉だと思います。そういうものが教育できるのは女子大学しかないのであって、そういうものも本来に豊かな多様性として意識をしているのではないかと思います。

伊藤——先ほど福井先生のお話にもありましたように、アメリカでは女子大学は一時、共学化の波にさらされつつも、また少し復活してきている。その一方、イギリスなどでは女子大学はほぼ壊滅状態というか、かなり少なくなってきた。そのような状況の中で日本では女子大学がかなりの数存続しているということには、「文化」ということも関係してくるのかもしれませんが、何かご意見があればぜひ伺いたいです。

竹内——日本の「文化」というのは、基本的にある意味「女文化」だと思っています。それが儒教や仏教の影響を受け、また、武士社会などは少し違ったかたちにもなっていますが、それこそ『古事記』の最初のもつとも尊い神様である天照大神が女の神様であるということなどを考えますと、日本はひょっとしたら、女性が女性であるということを中心に、男の側がそれをともに支えていくというのが基本にあつて、それが逆転して男社会、武士社会、あるいは儒教社会のようになってきているところがあ

るのではないかとも思います。

そういうことも含め、女性が女性であるということ自体が相当に大切なことであり、そのことをどう考えるか、そして教育するかということがずっと潜在的には問われてきている。そのことが、現在も女子大が多いという一つのひとつの文化的な背景にも少しはかかわってくるのではないかと思います。

## 女性のリーダーシップとは何か

伊藤—— ありがとうございます。それではまだ今の議論も尽くされてはいないとは思いますが、次のテーマ、「女性のリーダーシップとは何か」ということに関して伺いたいと思います。

羽入先生がお話くださったように、お茶の水女子大学はリーダーとしての女性を育てるということを進めていらつしやるわけですが、現在、リーダーを育てるということを掲げている女子大学がとても多い。そのことと、いま羽入先生がおつしやつていたような女性が主役になるということはどのように関係しているのか。あるいは、竹内先生がおつしやつていた女性のもてなす力、マネジメントする能力と、社会をリードするということとは、同じようであることでもあるのかなと思うのですが、そのあたりについてのご意見等ありましたらお聞かせ願いたいと思います。

羽入—— 竹内先生が日本の「文化」との関係で女子大のことをお話くださいましたけれども、それと関係しているように私は思います。お茶の水女子大学でリーダーシップ論として、「強く集団を率いるリーダー」と言うと、学生は違和感をもつようです。「私は違う」と。日本でのリーダーシップとは何なのかということとをあらためて考えなければいけないのではないかと思います。まして、それを日本、あるいはアジアから、女性のリーダーシップとして発信するべきではないかと思っています。

具体的には、先ほどリーダーシップ論の中で少し申し上げましたけれども、そこには三つのキーワードがあつて、その中に「しなやかさ」というものを入れました。自信を持つて組織を率いるという意味での *confidence* を「しなやかさ」と言つたのですけれども、「しなやかな強さ」と最近はやつております。学生には、寛容さ、多様性を認めるという意味としても理解してもらいたいと思います。マネジメントというのは、方向性が決まっていることをどううまく組織化するか、実行に移すかということであり、リーダーが持つべき能力とは、責任を持つて理念を示すということだと思ひます。つまり、人々を率いる目標を立てられることがリーダーシップの一番の要です。日本文化ということを考えますと、さまざまなあり方を前提にして判断していくということにな



るのではないかと思います。

リーダーシップ論というのは難しいですが、ひとつ重視しているのは、たとえば経済効率とか、大きな組織を率いることに限らなくて、自分がいる場を担うことができる人がリーダーシップの一番重要な要素だということです。

福井—— 先ほど女性らしいリーダーシップの取り方について、竹内先生は「おもてなし」という言葉を使ってご説明なさって、私もなるほどなと思いました。もちろん個人差はあると思いますが、でも男性のリーダーシップの取り方と女性のリーダーシップの取り方にはあきらかに違いがあるのではないのでしょうか。

ボンパドウル夫人が男だったら、サロン文化は成立したのかどうか。仮に成立したとしても、中味は相当違ったものになっていたことでしょう。これは私の個人的な経験ですが、ケアハウスの支配人が男性か女性かによって、そのケアハウスのスタッフの動き方やモチベーション、心配りや対応の仕方、さらにはその施設全体の雰囲気が相当違ってきってしまうのですね。これは決して性別役割分担論ということではなくて、同じ役回りでも男女によって機能の相違というものが出てくるし、女性の抱えもつ潜在的力というものを考える時、そのことを相当きめ細やかに考えておく必要がある、というか、そう考えておいた方が、人類

はいっそう豊かなものをつかみ取ることができるのではないかと  
思っんですね。それはさきほど申しましたアメリカの女子大学な  
どで関心の対象となっている女性のもっている認識の仕方やもの  
の理解の仕方、あるいは行動の仕方という問題とも重なってくる  
ことだと思えます。

竹内—— 羽入さんが先ほど発表された中で、指導的な立場に立  
つことの具体的な指標として、政治的経済的なものをあげられま  
したよね。その政治的経済的なという言葉、もちろんそれ自体も  
もう一度分析する必要があるのですが、そういう、言ってみれば  
「外の社会」というか、先ほどの言い方で言えば、具体的にお金  
や権力のやり取りをするというかたちで換算される世界でのリー  
ダーと、たとえば「ととのえ、もてなし」という、限定されたそ  
れぞれの場で、しかしその全体をマネジメントするというような  
かたちでのリーダーとは、どれだけ違うのか。

いま伊藤さんがそこを分けて考えるのか考えないのかという問  
題提起をされましたが、今まではマネジメントする、その場をま  
とめていく、あるいは家庭を維持するといった場面でのリーダー  
力のようなものがあまりにも軽視されてきたように思います。政  
治的・経済的な場面での指導者のうち女性を30%以上に、とい  
うような数値目標を立てて、それが達成されれば男女共同参画が実

現されたんだというような発想は、政治的経済的な、権力や貨幣が重視される社会での換算の仕方であって、そうした数値目標をたてて考えるという考え方それ自体を変えていくことも必要なのではないでしょうか。

羽入—— おっしゃっていること、本当にそうだと思います。指導的立場にいる女性の割合が30%あればいいという話ではなくて、そのことを通して、30%新しい考え方が表明され、実行に移されるということが重要であると思います。

竹内—— なるほど。そうですね、そういう考え方がいいですね。ただ、現在のような男社会はそのままにしてそこに女を入れる、というようなかたちでは、女のほうも相当大変だし、男もまた大変だと思うんですね。そのあたりのこともきちんと考えながら、そして社会の発想や考え方、構造を変えていくようにすれば、いろいろな世界が浮かんでくるような気がします。

湯浅—— 下田は「その場その場で必要とされる人になりなさい」というような言い方をしています。ひとつの集団にはリーダーは何人もいらないわけで、ひとりいればいいのですが、もしそのリーダーが欠けたときに、代わりにリーダーシップをとれる

人がいっぱいいるということがその集団のレベルの高さになるのではないか。それぞれの場で必要とされる人になりなさいということが、リーダーシップということにつながるのかもしれないと考えました。

伊藤—— いまお話を伺いながら、先ほど羽入先生が出てくださったジェンダーギャップ指数の中で、日本と儒教や漢字等多くの文化を共有している韓国も同じぐらいに順位が低いということにも、なにか「文化」的な問題がかかわっているのではないか、そういう「文化」ということも含めて、リーダーシップや女性の働き方の内実をあらためて問うてみないとならないのではないかと、そうしないと言葉だけが先走ってしまうことになってしまうのかなと感じました。

### 男らしさ／女らしさ

伊藤—— では、まだこの問題も議論は不十分かと思いますが、次の「男らしさ／女らしさ」の問題について考えたいと思います。ご質問も来ています。「男女共同参画社会を推進する際に、男らしさ／女らしさというものを求めたり、あるいはそれについて言及したりするというのはどうか。男女共同参画社会と男ら



しき／女らしきというものは果たして両立するのか。そういうことも含めてお答え、ご意見等いただければと思います。

竹内—— いまのご質問は、「男らしき／女らしき」を言うことと、共同参画社会は矛盾すると言っているのですよね。

伊藤—— おそらく、「男らしき／女らしき」を言うことは、男女共同参画社会においてはありなのか、なしなのか、というご質問で、もしかしたらなしなのではないか、ということも考えていらっしゃるのではないかと思います。

竹内—— 僕も基調報告の中で少し強く申し上げすぎたかもしれませんが、これは大きな問題だと思えます。そしていつもこのあたりの問題から議論がうまくいかなくなる、分かれるということもあるのです、この問題については丁寧に議論をする必要があると思うんですね。

少し前にアメリカ、中国、韓国、日本の何千人かの高校生に対する調査で、「男は男らしくあるべきか、女は女らしくあるべきか」という趣旨の質問がありました。日本の高校生では、このことを肯定する人の割合は、男女とも三割です。つまり、男は男らしく、女は女らしくあつてほしいと思う高校生は三割だったのだ

ですね。アメリカは、男と女ではちよつとずれるのですが六割程度、中国では七割、韓国でも六割が肯定していた。これをどう読むかという問題があると思います。ジェンダーフリーの流れや、あるいは教育のせいなのか。そういうこともあるとは思いますが、やはりもう少しゆつくり解析してみる必要があると思います。

そもそも「男らしい」「って何か、「女らしい」って何かということが、やはり文化によつて違うと思います。その調査では、たとえば「責任感が強い」ということは日本や中国では「男らしき」として捉える人が多かつたが、アメリカでは「女らしき」の一番大事なことでして捉えられている。また、「頼りになる」というのは、日本や中国では「男らしき」の特徴ですが、アメリカではこれは「女らしき」だということでありました。たとえばこういう具体的な中身にまで入つていって「男らしき／女らしき」とは何かと問えば、繰り返し申し上げますように、それは文化によつて相当違つてきていますから、言葉としてはそういう言葉しかないとしても、そういう中身も含めて具体的に考えていく必要があると思います。

たとえばこういう調査などもそういうものとしてよく知っておく必要があるのですが、そのことを念頭に置いた上で、僕が今日の基調報告で申し上げたのは、だからこそあらためてそういうことを、こういう調査等も含めてさらにクリアーにしなげら、「男

らしさ／女らしさ」を際立たせていいのではないかということですね。もちろんそのことが男女差別になるのなら、それはそのひとつひとつを検討し、直していく必要があるのですが、だからといって「男らしさ／女らしさ」を消すかたちで差別をなくすのではなくて、むしろ、違うものを違うものとして際立たせ、それらを面白く組み合わせ、交流させることによってこそ、本当の意味での男女共同参画というものが可能になると僕は考えています。ですので、いまのご質問の「その両立は無理ではないか」というお考えもわかりますけれども、僕はあえてそうするほうが面白いのではないですか、と考えています。

福井—— いや、ホントにそう思います。それとの関連で、「女性的な認識法」というものについてもう少し申し上げておきたいと思うんですが、このところ鎌倉女子大学の学生諸君が神奈川県経済同友会が主催する「産学チャレンジプログラム」で四年連続「最優秀賞」を受賞しています。このプログラムは神奈川県下の国公私立、昨年の場合には十六大学、二二九チーム、七四〇名を超える学生達が参加した企業提案型のプログラムなのですが、コンペティションが終わってから学生諸君が報告にきましたので、「君達、こういう提案をしたのか」と聞きましたところ、さまざまな企業からいろいろな課題が出され、本学チームが担当したの

はこういう課題だったのだそうです。ある鉄道会社の駅構内のガード下が殺風景な空地になっている、これをどうにか活用して、駅は元より周辺の街の活性化につなげたい、その解決案を提案してもらいたい。

では、彼女達はどういう研究・提案をしたのかといえば、まず駅周辺の人口動態を調査する、次に秋葉原、新橋、町田等々、主だった駅のガード下を調査する、更に産地直送ができる物産は何かと近郊の産業分布を調査する、それらを参考にしながら、当該の駅に適った空地利用や店舗の構成を提案するわけです。

それが私面白いと思ったのは、女性の感覚を基礎にしながら考えるのですね。例えば、女性がめぐる店舗の順序はこういう方がいとか、あるいは親子づれがこのくらい歩くと疲れてくるし、子どもはそろそろアイスクリームを欲しがり始めるとか、つまり生活感覚に根差した女性らしい感性に基づいて分析しようとするわけですよ。言わば合理的な学問の網の目からこぼれ落ちてしまう、非合理性も含んで成り立つあるがままの現実をきめ細やかにすくい上げる理解力、しなやかな提案力といったいいんでしょうか。それに加えて、協調的な女性の資質に基礎をおいたグループワークなどが評価されたのではないかと思います。

近代の学問は数量的な認識というか、合理性一辺倒で処理してしまうところがあるわけですが、私は他方において、こうした女

性らしい認識法はもつと本格的に研究の対象になっていいのではないかと思います。冷やかな理性の物差しに合わせて現実を理解するのではなくて、学問史の中で置き忘られてきた感性を通じて生活世界を解き明かす生活学が本格的に構想されていなくてはならないと思うのですが、こういう学問などの発展は女子大学に期待される、女子大学が担うべき学術の大きな可能性の一つといったふうに思います。

それともうひとつ、ちよつと別の観点から申し上げたいんですが、平成十三年に男女共同参画社会基本法が成立しまして、その第七条に「国際的協調」という項目がございます。読んでみますと、「男女共同参画社会の形成の促進が国際社会における取組と密接な関係を有していることにかんがみ、男女共同参画社会の形成は、国際的協調の下に行われなければならない」。これはもちろんその通りなんですが、注意しておかなければならないのは、この条項がおかれている理由は今後おそらく取り交わす可能性があるであろう国際条約などが想定されているのだとは思うのですが、しかしそういう国際法とは別次元で現に成り立っているそれぞれの社会の文化性に根差した倫理というものはそう軽いものではないのであつて、国際間にあつても決して一樣ではないということです。島国に閉じこもつて生きてきた反動からか、私達日本人は後発意識が強くて、グローバル化の時代などといわれると、

これからはすべての価値や文化がなべて一様化されていくなどと、ただちに前のめりになつて考えがちになるわけですが、グローバルゼーションということはそう単純な一元的現象ではなくて、かなりコンプレックスな現象ととらえておかなければならないものと思います。その例はいくらでも指摘できる。

これは本学の女性のイギリス研究者の方からのまつたくの受け売りの情報ではありますが、現代イギリスの女性論に「コンプリート・ウーマン」というものがあるんだそうです。もちろんこんなことを言うと、じゃあ「インコンプリート・ウーマン」があるということなのかと、ただちにまぜつかえされると困るのですが、そんなたわいないことではなくて、それによれば一つ「結婚」、一つ「三人の子ども」、一つ「キャリア」なんだそうです。私たち日本人の西洋理解は何につけどうも一面的になりがちなところがあるわけですが、私達が考えるほどイギリスの人達は「結婚か、キャリアか」といったような二項対立で考えているわけではなさそうなんです。

もちろん家庭と仕事が両立できるようなインフラの整備は日本社会がこれからますますもつて押し進めていかなければならないことは間違いないわけですが、こうした問題は私たちの意識によつても相当制約されるところがあるわけで、先ほど来、竹内先生が「文化」との関係性の中で人間の意識を考えていかなくちや

いけないとお話しになられているように、私達はやはりこういう事例についてもよくわきまえながら、多角的にグローバリゼーションをめぐる問題について慎重に考えていく必要があるように思いますね。「グローバリゼーション」という複雑多様な現象と、すべてを一元的に収斂させてしまおうとする「グローバリズム」というイデオロギーとは似て非なるものなのでから。

伊藤—— ありがとうございます。いまのご議論は、次に来ているご質問とも少し関係あるのではないかと思います。これは羽入先生に対してのご質問ということですが、羽入先生に限らず、ということになるかと思えます。「いろいろな場面で女性の視点が大事故だと思うけれども、仕事に対しては男性とか女性ということではなく、人間として関与することが必要なのではないか。仕事には、たとえば家庭とか、あるいは社会や地域社会などとはまた別の論理が必要なのではないか」というご質問、ご意見です。このことに関して何かコメントありますでしょうか。

羽入—— できる範囲でお答えします。

「別の論理」と言うときには、じゃあ「別ではない論理」とは何なのかということをもまず考えてみるというかもしれません。社会的な活躍という場合には、経済効率が高いこと、力を持つこと、

これがよいことである、評価されるべきものであると考えるのであるとすれば、ならば女性が働く場合にもそのような働き方をしなければいけないのだということなのか。

私は、男女共同参画社会では、そのようなひとつの評価のされ方だけではなく、女性にしても男性にしても、人が活躍する場での評価の軸が複数に生じるようにすること、それが重要なことだと思っています。ですから、家庭の論理と社会の論理、あるいは経済効率の論理等を別に考えるということよりも、むしろ、人が生きていく場面がそれぞれに多面的というか、多様性というか——今日は私ひとりが「多様」という言葉を使っているのですけれども、こういう議論だと、たいてい「多様性」というのが飛び交うのですが——、多様なあり方を認める。それは家庭かもしれないし、仕事の場でもあるかもしれない。

つまり、すでにある社会構造を固定したものとして考えて、そこで働くためにはその論理でいかなければいけないという考え自体に、もう一度見直しが必要なのではないかと私は考えています。

伊藤—— ありがとうございます。

もうひとつ羽入先生にご質問が来ています。「羽入先生は女性らしさという言葉を使っていらないしやなかったが、お茶の水女

子大学は女子大学としての使命として、どういう女性を育てようと考えていらつしやるのか。

羽入—— 十分ぐらい時間が必要です（笑）。

すごく難しい話なので、先ほどから竹内先生がおっしゃっているように、これは丁寧に考えるべきことだと思っています。そしてひとつだけ申し上げたいと思っていたのは、女性らしさ／男性らしさ、女らしさ／男らしさというときに、それは主体としての女性、あるいは男性と同義に使っているのを確認する必要がありますということです。つまり、私が何かをしたら、それが女性らしさということなのか。それともそうではなく、女性らしさという、そういう文化があつて、そういう意味で「らしさ」というのがあるのか、ということです。ですから、女性が主体であることと女性らしさとは違うと、はつきり分けるべきだというふうに私は思っています。

お茶の水女子大学の女子教育ではどういう女性を育てようとしているのかということですが、一言で申し上げれば、繰り返しになりますけれども、今あるものを前提にしない、新しい芽を大切に、新しい社会をつくる、そういう発想を持った女性を育てることと考えております。

伊藤—— ありがとうございます。

この「男らしさ／女らしさ」という議論もまだまだ深めていかねばならないところですが、いま羽入先生がおっしゃっていた多様性ということ、あるいは先ほど福井先生がおっしゃったような事実として人間がさまざまであるということ、つまり人間は赤裸というか、みんながまつさらなニュートラルな存在としてはないというところから始めないと、私たちは何か大切なものを見落としてしまうのではないかということが、この議論に関する大切な問題点として出たのではないかと思います。まず目の前にあるもの、事実をきちんと見つめるということですね。

### 学祖の精神、建学の理念に立ち戻るといふこと

伊藤—— 次に、いま全国的にとても多くなっている、大学の学祖の精神、あるいは建学の理念に立ち戻るといふ取り組み、そのことについて伺えればと思います。

湯浅—— 下田歌子の教育理念を具体的なことで先ほどから申し上げているのですけれども、本学も二年前まで、私が学長職にございました。六年間勤めましたけれども、教育改革というか、特に共通教育を見直したときに、自校教育、具体的には下田歌子に

学べる教育を必修化するために、準備期間だけで二年間かかりました。これは学長職だけが走っても、先生方全員と一緒に来てもらわなければ何の教育にもならないので、教授会で認めていただけで、同じ理念による大短の共通教育として、全学必修のかたちで、「実践入門セミナー」という中の一コマとして、「下田歌子を学ぶ」という科目を設けました。その指導担当は当時の学長職の私がやったのですけれども、今はだいたい時間がたちましたので、それぞれの学科で自校教育を行う。当然下田の話もしております。

そういうことで、やはり私立大学は福井先生もおつしやいましたけれども、創立者の教育理念をもつて教育していることを誇りに思っている大学です。そこに戻るのは当然です。ただ、それが「下田教」や「実践教」になつてはいけません。常にその教育理念を今の時代にひきつけて、我々は女子大ですので、今の女子学生の人材育成には何が必要なのかをそこから引き出してくる。ですから、ある程度は色合いは変わるものだと思います。でも根本は変わらない。だからその辺を教員間が理解しないとダメというところが一番大きいし、あと一番大事なことは、本当はカリキュラムの隅々まで、その教育理念が血が通っていないといけないと思います。はつきり申しあげて、実践はまだそこまでいっていないと思います。ただ、やはり最初がなければそこまでいかないので、ひとつやっぱり我々の意識ですね。そういうふうなことで原点に

戻って、学生に何かを戻していこうという意識がなければ、末端まで戻りようのない話です。理想的にはもう、隅々まで、その時々、「下田教」ではない、「実践教」ではない、そのときそのときに紡ぎ上げられた教育理念が末端まで届かなければいけない。それが教育理念だと僕は思います。だからそれは、実践がどうかということではなくて、私学の教育理念はそういうものではないか。そして、我々もそれを目指しているということを申し上げたいと思います。

伊藤—— 福井先生、いかがでしょうか。

福井—— 建学の精神というものを受け止める問題意識としては、いま湯浅先生が言われたこと、まったくそのとおりだなという思いで何っておりました。私も建学の精神というものをそのように受け止めるべきものと考えております。概要につきましては先ほどの提題で申し上げた通りですが、本学もとても大事にしております。一年生の必修授業として実は私自身が担当しています。

恥ずかしかったので先ほどご紹介しなかったのですが、私が『知と心の教育——鎌倉女子大学「建学の精神」の話』という本を書きまして、これを活用しながら授業をしております。内容は学祖が遺されたさまざまな大事な言葉を古今東西の古典や思想と



照らし合わせながら、またそれと現代的な諸問題と絡め合わせながら話すといったものですが、現代に生きる学生諸君が自分の実感のもてるかたちでそれぞれに建学の精神についての理解を深めていってくれたらいいなと思っています。そのときに、特に大事にしたいと私が考えていることは、大学の授業ですから、それに見合った学問的知識や情報を伝達していかななくてはならないことはいうまでもありませんが、むしろ学生一人ひとりの心の奥底にとどく言葉を私自身が実感をもってどれだけ語りかけることができるのかということにあるように思っています。

## 総括

伊藤——では、この話題も十分に尽くされてはおりませんが、時間もまいりましたので、最後にそれぞれの先生方、三十秒から二分ほどで、本日のご感想やあるいは最後に言い残したことをまとめたいだけだと思います。

では湯浅先生からお願いたします。

湯浅——今日は先生方、そして会場みなさん、ありがとうございます。下田歌子研究所は実は三年間のプロジェクト研究の時代がありまして、これももちろん学園の費用で動いていたも

のですけれども、その実績をもって、しかしまるで違いますのは、常設の研究所として部屋を持ち、専任研究員もつき、専任事務職と事務長がいるというかたちで設置したものです。私にはあるべき研究所だと思っていますのでこれから地道な活動をするとともに、何度も申し上げますけれども、こういう連携を通して、実践だけでいいというものではない、女性教育を深め、女性のキャリア、女性が元気で働く世の中を構成できるように連携していきたいと思います。そのためにまたどうぞ意見もたくさんくださいますようによろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。（拍手）

羽入——一つは先ほどの建学の精神についてです。私どもの大学では文部科学省からミッションの再定義、つまり、あなたの大学は何を建学の精神にしますかということ求められました。それもありましたが、実は学生のほうから、お茶の水女子大学のことをもっとよく知りたいという要望がありまして、「お茶の水女子大学論」という授業を開講しました。一年生向けの授業です。

それからもう一つ。私は本日のお話で図表をたくさん使いましたが、それは内閣府の資料から引用したものが多くございます。受付に置いておきましたので、関心があればありましたら、どうぞお持ちください。内閣府のHPでもご覧になれます。



それから最後に申し上げたいと思っていたのは、「男らしさ／女らしさ」という話がありましたけれども、その話があまり強調されると、「女らしさ」という言葉ゆえに、あるいは「男らしさ」という言葉ゆえに、一人ひとりの女性や男性それぞれの活動が制限される、あるいは強制されるということがないようにしなければいけない。そのことをもって竹内先生は「丁寧」——というふうにおっしゃったのではないかという気がいたします。そこはとも注意する必要があると思います。以上です。（拍手）

福井——先生方の語り口はそれぞれに違っていたと思いますが、でもけっこう同じようなことを考えておられるんだということを確認できましたことは私個人にとつて収穫でありました。こういう機会に参加させていただきまして本当にありがとうございます。（拍手）

竹内——この四月二十日から朝日新聞で「こころ」が連載されています。これは一九一四年の四月二十日から連載されたものをそのまま掲載しているのですが、つまり百年前、当時漱石が訴えかけていた問題は、現在の我々にも訴えかけるはずだと考えて、朝日新聞は連載しているのだらうと思います。そこにはいろいろな問題があるかと思いますが、その中で漱石はこういうことを

言っています。「自由と独立と己に満ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんな淋しさを味わわなくてはならないんだ」。結局その寂しさの中で先生は自殺をしていくわけですが、この淋しさというのは、もともとは「すさぶ」という言葉で、「さびる」、金属がさびるという言葉と同じ根つこの言葉ですから、つまり本来持っていた生気や、あるいは活気が失われて荒涼としている、そういう意味合いです。

この百年前の寂しさと比べれば、現代はそれよりさらに自由と独立と己に満ちた時代になってきているわけで、今我々は本当に淋しい時代に向かって生きているんだということを、僕自身も思っています。つまり、男も女もそれぞれ自由と独立に満ちた生き方をしたならば、もつと淋しくなるだらうし、もつとさびてしまうのではないか。この男女共同参画社会ということも、そういう意味で、男と女を参画させ組み合わせしていく、その方向で淋しくない社会を作っていく、そういう努力というふうに読み替えることもできるわけです。そうしたものとして考えていく必要があるなど、本日あらためてますますそういうふうに思いました。ありがとうございます。（拍手）

伊藤——ありがとうございます。

最後に、今日何回か出てきた下田歌子の「摇篮を揺がすの手は、

以て能く天下を動かすことを得べし」というこの言葉について少しお話ししたいと思います。

この言葉は、第一義的には、女性が家庭を守ること、家庭でその能力を尽くすということが、家の中だけにとどまらず、実は天下をも動かしているのだ、男性たちが外で働いていることとつながっているのだということを言っています。下田は女性たちが主に執り行っている家政を「内政」とも言っており、国政や外政と同じ重要性を持った仕事であると言うのですが、しかしこのような下田の考えは、見方によっては、女性を家の中に閉じこめるための都合のいい方便としてのいわゆる「良妻賢母論」だと言われかねないこともあります。

しかし彼女がこの言葉を使っている文脈で言っていることは、女性たちが男性たちを下支えするというだけのことではありません。たとえば猛り狂った君主を、その后が、女性のやわらかさをもつて諭す、男性がカッとなったときにそれを鎮めてあげる。そういうことは主に女性たちが担ってきた役割であって、そういうものがあつてこそ、この社会は喧嘩や戦争ばかりの世界になることなく、きちんと成り立つことができるのだ、と下田は言っています。あるいは、男性ばかりでは、たとえばお酒などによつてどんどん社会がずさんでいくところを、「お酒はちよつと抑えたほうがいいんじゃないの」ということを社会運動という手段をとつ

て訴えていく女性たちがいた。そしてそれがアメリカで禁酒法の成立という具体的な成果をあげたことを、下田は高く評価しています。つまり、男性の論理とは違う論理があつてこそ、初めて社会というのは成り立っていくのであり、そして実際に女性たちが社会を、世界を動かしている面も少なくないわけです。ですから、単に女性が男性社会を支えるというよりは、むしろ、女性があつてこそ、この社会はきちんと回つていつているんだという意味で、下田はこの「揺籃を揺がすの手は、以て能く天下を動かすことを得べし」という言葉を使っています。

この言葉が出てくる帝国婦人協会の設立主意書は、中流の女性の教育を推進することを宣言するものだのですが、下田は、当時の女性たちの多くが、自分の考えや自分のあり方に自信を持てないために、すさんだ精神状態にあり、そしてずいぶんとずさんだ生活を送っていることを、いくつもの文章の中で嘆いています。そういう女性たちに、いかに自信を持たせるか、自分たちのやっていることが社会に対して、あるいは社会とは言わなくても、いろいろな場面で意味があるという自信をいかに持たせるか。つまり、女性たちがプライド、自尊心といったものを持ち、誇り高く生きていけることを願つて、彼女はこの文章を書き、そして実践女子学園を設立したと私は考えております。

先ほど竹内先生がおっしゃったように、現代を生きる私たちも、

どこかで淋しがり、生き方を悩み、決して自信を持つて生きていくわけではない。そのような中で、いかに自分たちの生き方を考えるのか。そしてことそういう生き方の問題に関しては、現代を生きる私たちですが、やはり先人に学ばねばならないこともたくさんあるのではないか。そういうふう今回のシンポジウムを通してあらためて考えました。

本日は長時間お付き合いくださいましてありがとうございます。このシンポジウムの様子はニューズレターやホームページ、あるいは下田歌子研究所の年報などでもまた報告させていただきますと思います。今後このようなシンポジウム、講演会を催してまいりたいと思います。引き続きみなさんにご参加いただければと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。本日はまことにありがとうございます。（拍手）